

島根県青少年交流事業「交流の翼・中国プログラム」に同行しました

北京事務所

「交流の翼・中国プログラム」とは

本事業は、2002（平成 14）年の「日中韓国民交流年」を記念して、友好提携を結んでいる島根県と中国・寧夏回族自治区、韓国・慶尚北道の3地域が共同し、相互に青年を派遣する交流プログラムとして行っており、今年で 11 回目の開催となります。昨年度よりモンゴル・バヤンホンゴル県からの派遣もあり、一層の広がりを見せています。

今回、クレア北京事務所の活動支援の一環として、中国・寧夏回族自治区で行われた「交流の翼・中国プログラム」に同行しましたので報告します。



寧夏回族自治区

面積 66,400 k m²（島根県の約 10 倍）

人口 約 618 万人（島根県の約 9 倍）

区都 銀川市（松江市と友好都市提携）

民族 漢族が最も多いが、回族も人口の
3 割以上を占める

島根県との友好提携日

1993（平成 5）年 10 月 6 日

言葉や文化を超えた青年たちの交流

昨年からの日中関係、大気汚染の報道、鳥インフルエンザの発生という事情から、参加者の応募状況は低調であった中、島根県からは3名の青年の参加を得ました。日程は 8 月 16 日（金）～22 日（木）で行われ、そのうち寧夏には 17 日（土）～21 日（水）4 泊 5 日の行程で滞在しました（筆者は途中離団）。

〈交流プログラム日程・内容〉

1 日目	開会式、ホームステイ開始
2 日目	全日ホームステイ
3 日目	沙湖視察及び文化体験活動
4 日目	銀川演劇団見学、ムスリム孤児院訪問、餃子作り体験、出し物披露、意見交換会
5 日目	北京へ移動

各国の青年たちはホームステイ、文化体験、意見交換会等、様々な交流を行いました。

その中でまず驚かされたのは、青年たちの語学能力の高さです。開会式での自己紹介において、中国、韓国、モンゴルとも流暢な英語でスピーチを行う中、島根の青年も堂々と自己紹介をしていました。今回の参加者は他国より年齢層が高かったこと、参加者3名中2名が留学経験者であったことも手伝い、ユーモアを交える等、存在感のある自己紹介をしていました。他国の青年の中には英語を解さない参加者もいましたが、英語以外の言語を習得する等、自国以外にも目を向けている印象を強く受けました。

また、出会ってすぐでも臆せず話しかけ、毎夜遅くまで語り合い、視察先ではジェスチャーで思いを伝えるなど、青年たちのコミュニケーション能力の高さを感じました。

昨今の青少年交流では、日中関係や日韓関係を不安視する周囲の声も聞かれますが、青年同士の交流活動には全く影響することはありませんでした。むしろ、その話題を敢えて避けて語り合えたことが嬉しかったという参加者もあり、非常に頼もしく感じました。青年たちが互いに友情を育み、言葉や文化の違いを感じながらも理解し合おうとする姿勢には見習うべき点も多かったように思います。



記念撮影の様子



沙湖でポーズをとる参加者

おわりに

青年たちは一様に「参加してよかった」「友達との別れが惜しい」「ホームステイが楽しかった」と顔を輝かせ、再会を誓い連絡先を交換していました。短い時間でしたが、多くの思い出と刺激を持ち帰ったのではないのでしょうか。

こういった通常の国外旅行とは違った異文化間のコミュニケーションの機会が与えられるのは非常に意義深く、青年たちの今後に及ぼす影響は計り知れません。次世代を担う青年たちのつながりは、地域間の友好関係だけではなく、ひいては国家間の関係強化にもつながります。

国際交流分野においても、新たな世代の育成が課題とされる中、こういった青少年交流には、クリアとしても協力していきたい分野であると強く感じる同行となりました。

(桑本所長補佐 島根県派遣)